

序

謎めいて語ることの多かったヘラクレイトスにしては、「神にとつては全てが美しく、善く、そして正しい。しかるに人々はそのあるものを不正とし、他のものを正とみなした」という『断片』一〇二は一見平板に見える。しかし、この断片は難解と言われるヘラクレイトス哲学の中核に位置するものであり（とされており）、言葉に託された事柄を確かに把握することは難しい。この断片を解釈するためにさしあたり援用しうるものは、「神は昼夜であり、冬夏であり、戦争、平和である」（六七）、「相反するものが同調し、不協和なものから最も美しい調和が生ずる」（八）、「顕ならざる調和はそれとして明らかなる調和よりすぐれている」（五四）、「人間のエートスは叡智を持ちえないが、神のエートスは叡智を持つことができる」（七八）などの他、知や美その他あらゆる点において神の絶対的優位を説く八三、宇宙の美についての一二四、八とも関連して重要な一〇や五〇、五一などである。これらの断片はしかしそれぞれに伝承されたものであるから、体系的な相関性は期待する程にも明らかでなく、我々は結局断片の間を彷徨うことになってしまう。しかし、さしあたりヘラクレイトスの思想として確かに思えることは、人間のエートスが相反し分極化する多へ向つて全体的調和を看取できないこと、それにも拘わらず何かしら異なった価値の位相が包越的に存するように予感しうることなどである。もしヘラクレイトスの考えるような美や善や正の位相がありうるとしたら、各々の学問分野や研究において腐心していることは却つて全体の相を危くするのかも知れない。

しかし、調和とは「逆向きの調和」であり、相反と調和が同時に存立することこそが美しいとしたら、異なる多を析出してゆく分析的な思惟の形式を捨てて一挙に統一的全体の綜観へ移行してゆくことを急ぐのはむしろ間違っていることになる。我々は「全てが美しい」と言いきる段階にもまた美と善と正をあっさり並置してたじろ

がない境地にも未だ遙かに遠い。事象の相反性や多極性をとても十分には経験していないからである。むしろ対立や異なりを極めてゆくところにこそ、たとえその次にとるべき方途が不明であるとしても、活路がひらけてゆくことを期すべきなのであろう。その意味で我々にとってはその定義は多様であろうが経験に即して事象を分節化し名を正してゆくソクラテスの方法がやはり常道である。ただヘラクレイトスが「全てを自己自身において学んだ」と言うとき、一体彼はどのように学んだのか、どのようにして全てを逆向きの調和として掴み得たのか、そしていかなる信念をもってしかも平明な語り口で「神にとっては全てが美しく、善く、そして正しい」と言い得たのか、真や美や善あるいは正という価値の相の下に存在と知との関わりを問おうとする者にとっては気に懸ることである。たとえこのような関心の持方がヘラクレイトスには笑うべきことであるとしても。

何故ここに敢えてこの断片を引いたかと言えば、それはソクラテス以前の哲学者達の言葉の内で形而上学的美学の見地からいつか決着をつけるべきものとして念頭にあったからにすぎない。前置が長くなってしまった。本紀要もどうか第四輯を刊行する運びとなったが、今年度は研究室予算が例年に比して窮屈であったため、提出された論考の内のあるものを分割、差替あるいは次号廻しとせざるを得なかった。なお留学中の津上君の論文は演習で読んでいる『パイドロス』の註釈として幾つか集められたもののひとつである。

五十一年に定年退官された渡辺護先生は昨年十月古稀を迎えられたが愈々御健勝であり、今年ワグナーの研究を刊行される予定であると洩れ承っている。斯学の発展のために心より喜びつつ、我々自身も思いを新にして一層研究に勤しんでゆきたい。読者各位の御批判を戴ければ幸いである。

昭和六十一年三月二日